

<会員の広場>

第 1 回 UEJ 「大学開放研究会」を終えて

大阪教育大学 准教授 出相 泰裕

1. 大学開放を取り巻く状況

高等教育段階における生涯学習に関する研究は生涯学習研究系の学会においても、高等教育学会においても研究大会における発表数は少なく、マイノリティ的な位置にある。また国立大学生涯学習系センター研究協議会（生涯学習系センター）においても加盟センターの退会がみられるなど、会員数が減少している。

その一方で、近年、大学開放と関わる GP 事業などが進められてきており、その中には生涯学習系センターが関わることなしに、企画・実施されているものも多く、生涯学習研究者をメンバーとして含まない組織が取り組んでいるような事例も多々見られている。

また「地域」という名称を含む学部を設置が相次いでみられており、大学は立地地域の活性化を担う人材の養成及び再教育にいっそう取り組んできている。加えて、大学経営が複雑化・高度化するにつれて、大学開放事業や学部の運営という点でも、事務職員の役割が大きくなってきている。

このように、大学開放研究の活気という点では疑問符がつくが、社会においては、高等教育段階における生涯学習の推進の重要性は増してきており、取組においても、職業人の学び直しや地域公共人材の養成など、多様な事業が行われるようになってきており、ここでは生涯学習研究者以外の教職員が多く関わってきている。

そういったことから、大学開放研究に従事する者がより共同的に研究を推進し、大学開放研究を活性化していく必要があると同時に、大学開放の実践に関わる生涯学習研究の専門家ではない教職員を包括した学習機会を設置する必要性が高まっている。

2. 第 1 回 UEJ 「大学開放研究会」の内容

そういった中、第一回 UEJ 「大学開放研究会」は 2015 年 7 月 18 日（土）に京都にある龍谷大学深草キャンパスにおいて行われた。出席者は主催者側を含め、11 名でそのうち

5 名が大学教員で、その他に大学職員、社会教育施設の指定管理者、元文部官僚、大学院生などが見られ、参加者は多種多様となった。

研究会の内容は二部構成で、第一部は京都大学名誉教授の上杉孝實氏による基調講演、第二部は事前に参加者から送られてきた問題提起に関する共同討議であった。

2-1. 上杉氏講演

上杉氏による講演は「生涯学習への大学のかかわり」というタイトルで、内容としては、大きく分けて二部に分かれており、第一部は大学開放の歴史、第二部は大学における生涯学習推進の動向についてであった。歴史について言えば、海外、主としてイギリスと日本に関するもので、イギリスの 20 世紀前半の大学拡張の歴史や日本の戦前から戦後まもない時期までの大学拡張・開放の歴史、さらには 60 年代のユネスコにおける生涯教育の提起から 90 年代までのイギリス、日本両国における動向を網羅するものであった。そして、90 年代イギリスのブリストル大学継続教育機構、リーズ大学成人継続教育機構並びにノッティンガム大学成人教育部の事例についての報告をはさみながら、生涯学習推進の課題、特に大学のそれを中心に講義された。

講演は内容的に広範なものであったが、大学職員など初めて大学開放について学ぶものにとっては、どういった背景で、またどういった形で大学開放が始まり、それがどういった流れを取り、今日どういった課題を持つのかといった基本的なことを学べるものであった。また研究者などにとっても、改めて大学開放のこれまでと現状について考えさせられる場となり、その後の共同討議を迎えることとなった。

2-2. 共同討議

当日の台風の影響で問題提起者の 1 名が参加できなかったということもあって、主として、共同討議では議論は問題提起①の「大学開放の養成する人材を活かす場を大学側がつくっているだろうか (問題提起者 佐々木保孝 (天理大学))」に集中した。提起者の問題意識は学んだことを活かす場があれば、学ぶことへの意欲も高まり、継続性も生まれてくるが、これまで日本の大学開放にはそういった発想がなかった。学びと活用の循環は大学開放発展に向けての基礎となるのではないかというものであった。

議論は日米比較にまで及び、アメリカでは 19 世紀のランド・グラント大学はその設立の理念から農業分野などでのエクステンション活動を実施していたが、一方、日本の大学

では職業教育が立ち遅れ、農業分野のエクステンションは農水省の管轄になっていたなどの意見が交わされた。その後、日本では研究者が現場の実践に精通しても評価されないなど、日本の大学の特性について引き続き意見が出された。

以前、アメリカのカリフォルニア大学の総長を務めたクラーク・カーが *Higher Education Cannot Escape History* というタイトルの本を出したが、大学も歴史・文化的土壌の影響下にある。その一方で地域雇用の創造も含めた職業教育も現代社会の背景の中で重要性を増している。そういった 2 つの効力の中で大学開放がどういった変容を見せていくのかを想像しながら聞くと、この議論は私個人にとって大変興味深いものとなった。

その後、議論は地域とつながるためには大学は現場を理解し、外部組織などと連携のできるコーディネーターを入れるべきだといった大学と地域間のコーディネート論に話移っていった。

私も問題提起の意味は非常に重要で、大学が養成した人材を活用するためには、学習の成果を活かせる場と人材をつなげる人が必要で、そういった人材を関連団体から職員として出向してもらったり、交流人事を行ったり、あるいは大学と地域が共同で人を配置したり、地域との連携をいっそう高度化し、地域をいっそう巻き込んだ形でコーディネート力を強めていく必要があるとの指摘をした。

3. 今後の研究会に向けて

共同討議では大学開放の抱える問題があぶり出され、それについて建設的な討議が行われた。ただ、第 1 回ということもあり、発言は主催者側が多くを占めた。参加者は前述したように、多岐にわたっており、参加者が多様な場合はさまざまな視点からの意見が得られるというメリットはあるが、逆に議論がかみ合わない、深まらないといった恐れもある。第 1 回も上述したような様々な意見が出たが、今後、参加者にさらに討議に参加してもらえるような雰囲気作りを心掛けると共に、参加者の多様性をどう討議に活かしていくかが重要となろう。

また今回、私立大学の職員も自主的に参加していたが、職員を含めて、現場で実践に関わっている者が大学開放の理念といった大学開放に関わる基礎的な事柄について理解を深めると同時に、自らの実践を報告・考察し合うなどして、大学開放実践に向けての資質能力を高めていく、さらには研究者も交え、実践事例から学び合っていく機会も作っていく必要があると感じた。

今後の学習機会についてさらに言えば、あるグループでは当然と思われていることもその外部では異議を投げかけられることも多く、大学開放についてもより広範にその意義を理解してもらえるようにしていかなければならない。そういったことから、大学開放に反対・慎重な立場の教員にお話を伺う回があってもおもしろい。

また大学開放に関わっている者は研究者も含めて UEJ 外部にもまだまだ多い。そういった方々も気軽に参加できる雰囲気作りを心掛け、研究会が大学開放に関わる者が参集する場となることを希望してやまない。

出相 泰裕 (であい・やすひろ)

山口県生まれ。大阪教育大学教職教育研究センター准教授、放送大学大学院客員准教授。

専門分野：社会人学生論、大学開放論、リカレント教育論。

著書：編著『大学開放論—センター・オブ・コミュニティ(COC)としての大学—』大学教育出版、2014 年。共訳、OECD 編『地域社会に貢献する大学』玉川大学出版部、2005 年などがある。所属学会：日本社会教育学会、日本生涯教育学会、日本学習社会学会、日本高等教育学会、日本比較教育学会、日本教育社会学会、全日本大学開放推進機構。